

10 日目 福島-8.5Km-上松-12.1Km-須原-7.5Km-野尻-10.1Km-三留野

新宿 23:20 発の夜行バスで 6/6(土)の朝 5 時に中津川駅着、開いている食堂はなく、コンビニでコーヒーとサンドイッチの朝食、座って飲食できるのでコンビニは本当に便利。

中津川始発 6 時の電車に乗って 7 時に木曾福島駅着、前夜の雨はやみ、青空が見えているものの気温は 10 度で冷たく、長袖のシャツを取り出して着る。

御嶽山遥拝所

福島を出ると最初の集落は塩渕、塩の着く地名が多いが、説明板によると「シオ」の地名は川の曲がった部分に付けられることが多いとか。「御嶽山遥拝所」の看板があり、階段を登ると鳥居があって立木越しに向こうの山の稜線の切れ込みが見える。多分、その真ん中に御嶽山が見えるのではないのかと想像するが、霧でなんにも見えない。説明板には、遥拝所は 4 箇所あり、北と西に各一箇所、東は 2 箇所で鳥居峠とこの地。そう言えば鳥居峠でも何にもみえなかった。やはり信心が無いせいとか、行いが悪かったのか、両方ともか。

木曾の棧(かけはし)

地道から山道となり細くなって、ガイドブックに「草道」と書いてあったのでこんなものかと歩き続けたら、ついにどこが道だか分からない竹林の中にはいつてしまった。これは道を間違えたと思ってかなり逆戻りして広い道に戻り、中山道の標識を見つけたが 30 分以上も損をした。しかも前夜の雨で草も木も露が残っており、そこで藪こぎをしたので下半身はズブ濡れ、新調の 5cm 防水トレッキングシューズも何の役にも立たず、靴下も靴の中も濡れてしまって不快。

国道と合流して暫らく歩くと「木曾の棧」の表示がでて、橋を渡ると木曾の棧の説明と句碑があった。

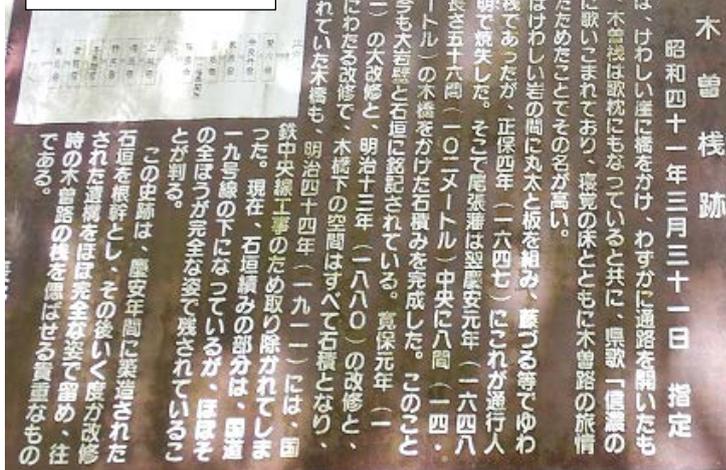
迷い込んだ竹林の道



木曾の棧の句碑



木曾の棧の説明



昔、ここには絶壁に並行して横に架けられた栈道があり、難所として有名だった。その跡を探したが良くわからなかった。国道の高いところから見ると、この付近は木曾川の両側の平地が少なく、山腹が川に迫っているのが難所だったことが良くわかる。私には迷い込んだ竹林のほうがよく難所だったが。歩き続けて、ズボンが乾いたところでスベアの靴下に履き替える。靴は濡れたままだがやむを得ない。

句碑は正岡子規の3句
 かけはしや あぶない処に山つつじ 子規
 栈や 水にとどかず5月雨 子規
 むかしたれ 雲のゆききのあとつけて
 わたしそめけん 木曾のかけはし 子規

上松(あげまつ)宿 38 番目

上松宿の入口に十王堂石仏群があり、その中に双体道祖神を見つけたが、彫った線が摩耗しておらず鋭角で、デザイン的に見ても現代の作品と思う。



十王堂石仏群



双体道祖神

上松宿には、宿場遺構は残っていないものの、旧家は沢山残っている。旧家でも現代建築でも、どの家も玄関の脇に枯れた木の枝を飾っている。多分厄除けかなにかだと思いが、何の木だろう、ネットで調べても分からなかった。まさか「ひのき」ではないだろうな。

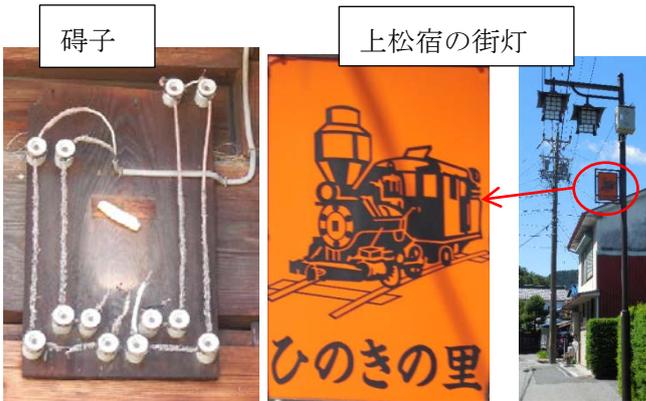


上松の旧家



玄関の木の枝

一軒の旧家で玄関の上に碓子(がいし)が残っていた。昔、大正・昭和の時代の配線はこんな碓子で、小さい頃、古い家に取り付けられていたのを記憶しているが、久しぶりに見た。



この宿場の街灯は楽しい、行灯型でしかもその下にある「ひのきの里」のSLもいい。このSLは木曾森林鉄道で木材運搬用に活躍したもの。

また、宿場の至るところには、「祝御嶽海十両昇進」のポスターが至るところにあり、この5月の場所で昇進したらしく、長野県出身では37年ぶりとのこと、オラが町の力士と微笑ましいが、御嶽は山なのにどうして海がつくの？

上松宿の文学碑と歌碑

上松小学校の手前に茂吉の歌碑、玄関に藤村文学碑があり、藤村文学碑の横に学生が本を読んでいる像がある。藤村の像かと思ったが何も書かれておらず、ネットで調べても分からなかった



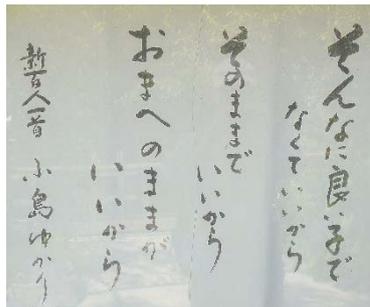
「駒ヶ嶽見てそめけるを背後にし
小さき汽車は峽に入りゆく 茂吉



山はしつかにして性をやしない、
水は動いて情をなぐさむ
洒落堂之記より 藤村



寝覚めの床



上松宿のはずれにあるのが「寝覚めの床」、絶壁の上から奇岩を眺める名勝地。但し、お寺の中の庭からでないと良く見えず、拝観料 200 円也を支払ってお寺にはいる。そのお寺の入口に掲示されていたのが左の新百人 1 首、なんか人を落ち着かせるようなほっこりとする歌。

寝覚めの床

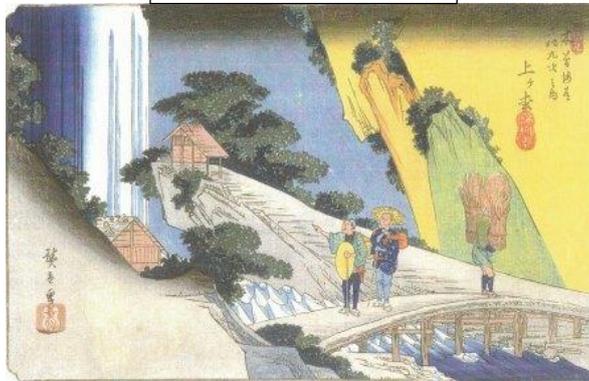


寺は絶壁の上であり、溪谷が見え、そこから下に降りる階段もある。大きな岩には名前もついている。浦島太郎は竜宮から帰ってきたが親兄弟知人は誰もおらず、さまよい歩いて山の中にいり、玉手箱を開けたところ 300 才のお爺さんになってしまい、びっくりして目が覚めたのが当地、で「寝覚めの床」。宝物館には浦島太郎の釣竿があると書かれていたが時間の無駄とパス。

小野の滝

道の左側に滝があり、広重の絵で有名な「小野の滝」と書いてある。確かに、街道に直接面して滝があるのは珍しい。滝の前に鉄道橋があり風情はもう一つだが、広重はどう描いているのかと考えてネットで調べた。

広重の小野の滝の絵



小野の滝



ツバメの巣の団地

ツバメの団地

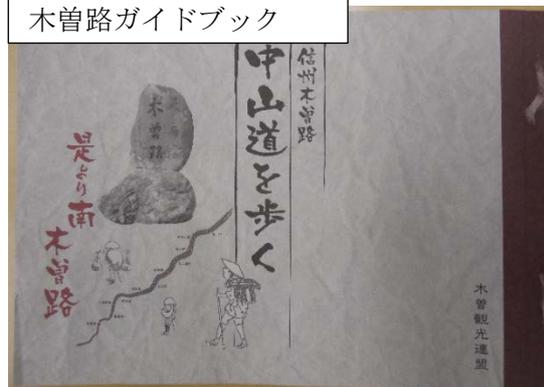
一軒の旧家があり、その軒下に沢山のツバメが乱舞している。近寄ると、その旧家の1階のひさしの横木の一つ一つに、計 10 個以上のツバメの巣があり、その殆ど全ての巣に子ツバメがいて、エサを与えに戻る親ツバメと、エサ取りに出かける親ツバメで混雑している。そのツバメ達の写真を撮ろうと思ったが、動きが早く、うまく撮れなかった。



木曾路ガイドブック

家の前に立っている人と目があい挨拶すると、「ガイドブックを持っていますか」と尋ねられ、持っていた地図を見せた。すると「良いものがあります」と家にはいり右の木曾路ガイドブックを持ってきて、「どうぞ使って下さい」と渡された。

木曾路ガイドブック



この木曾路のガイドブックは木曾観光連盟発行のスグレモノ、名所旧跡だけでなく、食堂・コンビニ・トイレ等が網羅してある。このガイドブックのおかげで、この先 5,6Km は食堂・コンビニは無いことが分かり、既に 1 時となっていたので、JR 須原駅の待合室で、非常食としてリュックに入れてあるカロリーメイト・ウィーダーインゼリー・バナナ・チョコバーを昼食として食べた。

須原宿 39 番目

寝ぬ夜半を
月いつるほどの
空たにもなし
子規



水舟と子規歌碑

ここは水舟の里、水舟とは丸太をくり抜いた水槽で、宿場の至るところにこの水舟があり、地元の人でその水を飲んでいる人もいた。旧家も多く、その旧家の前にも水舟がある。ここに限らず木曾は湧き水が豊富で誰でも利用できるようになっている。

この宿は本陣・脇本陣はないが、旅籠はそのまま残っている。「須原ばねそ」が聴けますとの看板があり、民謡が聴けるようになっている。「ばねそ」に興味を覚えてネットで調べたら「跳ねるような踊り」とあった。見てみたいな。



旅籠 かしわや



「須原ばねそ」の
ジュークボックス

野尻宿 40 番目



旅籠庭田屋

ここも遺構はなく、旧家が何軒もあり、全体として古びた町並みで殆どの家が「屋号」を掲げている。宿場の西のはずれにある家の屋号は「西のはずれ」だった、当たり前か。案内板には、木曾 11 宿の中でもこの野尻宿は旅籠や茶屋が 30 余軒もあつて繁栄していた、とあるが今はその面影はない。

目を引いたのは旅籠庭田屋で今は旅館。ガラス窓になっているが、建物は昔のまま。この旅籠は「男はつらいよ」の 1 シーンにでていたとのこと。

一軒の旧家で、奈良市の奈良町の「サル」と似たようなものを下げていた。写真の棚みたいところに飾ってある「サル」のような形の小さな人形を藁で包んでぶら下げている。多分「サル」と同じ厄除け。



野尻宿の旧家

「サル」のようなもの



牛小屋の牛



野尻宿を出て、山あいの集落で、記憶のあるどこか懐かしい臭い匂いがして、その先の農家に隣接して牛小屋があり、牛が 2 頭寝そべっていた。牧場でもないのに牛を飼っているのは今時珍しい。まさか耕運機の代わりに牛を使っているのではないだろうな。

マンホールの蓋

木曾福島の英語バージョンの蓋は全部英語表記で珍しく、SEWERAGE は汚水処理の意味、上松は木曾ヒノキと森林鉄道と町の花オオヤマレンゲ、大桑村の須原と野尻は村の花シャクナゲ。

木曾福島



上松



大桑村(須原と野尻)



野尻宿と次の三留野宿との間は 10Km あり、電車の本数が少ないので、その中間にある十二兼駅に 16 時に到着して電車に乗り中津川駅へ、バスで中津川インターに行き、高速バスに乗り東京帰着は 23 時。本日の歩数は 5.8 万歩。

10日目

